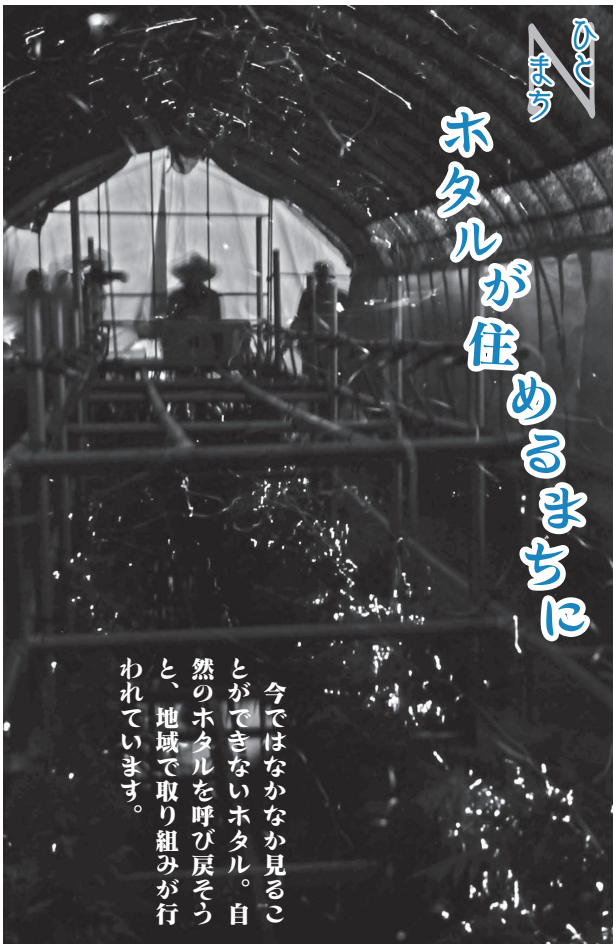
ひとまち

ホタルが住めるまちに

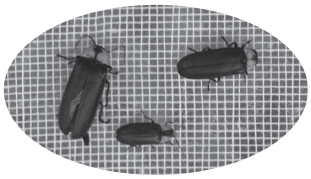
今ではなかなか見ることができないホタル。自然のホタルを呼び戻そうと、地域で取り組みが行われています。



ホタルドーム内は約5,000匹のヘイケボタルが光を放っています

ホタルが住むことができる自然環境を取り戻そうと、平成元年、地元の人々が中心となりホタルの飼育が始まりました。「昔はこの辺りでも自然のホタルがいたんだよ」と、ホタルを飼育をしている斉木忠巳さん（75歳・砂）。初めはホタルの幼虫を購入し、水槽や風呂おけで飼育していたそうです。当時から飼育に携わる山田聖二さん（73歳・砂）は「ホタルの幼虫はきれいな水を好むので管理が難しくて、水槽では限界だった」と話します。ホタルの生育環境を調べに八丈島まで行ったこともあるとか。水、餌などを工夫して、今では合計1万匹を超すホタルが育つようになりました。さなぎの間は土の中にいて姿が見えないため「成虫になって姿を現したときは、無事に育ってたんだと安心します」と、現在自宅で6000匹以上のホタルを飼育している常岡正吉さん（76歳・砂）。

ホタルの飼育方法を説明してくれた常岡さん（左）と斉木さん（右）



左がゲンジボタル、右の2匹がヘイケボタル。ヘイケボタルはメスのほうが大きくなります。

整備をする前の水路（上）と現在の様子（下）

平成7年、第1回ホタル祭りが開催されました。虫かごでの観賞でしたが、実物のホタルを見て、多くの反響がありました。ホタル祭りを継続させようと、平成9年に川越ホタル愛護会を発足、ホタルドームを作り、本格的に飼育を始めました。

同会は、育てるだけでなく、地域の環境整備にも力を入れました。水路の整備に合わせ、周辺の竹やぶや荒地をきれいに整備。その後も、雑草除去やゴミ拾いなどを継続的に行っています。また、地域の資源回収をして、運営資金に当てるなどの活動もしています。今では散歩の人が立ち寄ったり近くの幼稚園の散歩コースになるなど、安らぎの場にもなっています。

6月16日。まちに待ったホタル祭り初日です。午後7時30分、ホタルドームが開放されると、瞬く間に長い列ができました。先頭に並んでいた子どもは「今までホタルを見たことがないから楽しみ」。ドームの中でホタルを見た人たちからは「宝石みたい」「天井のホタルがプラネタリウムみたい」と歓声が上がります。

ホタルを見たことがない子どもに「これがホタルだよ」と説明

同会会長・佐藤正明さん（64歳・砂）は「自然のホタルが飛び交うようになるのが夢です。将来はホタルが住むことのできるまちにしたいですね」と話します。

初日はあいにくの雨でしたが、長蛇の列。16日・17日合わせて3,000人を超える来場者でにぎわいました。

子ども囃子が祭りを盛り上げます

ひとまち ふおとニュース

はっけよ～い!!

6月16日、川越八幡宮でこども相撲大会が行われました。小学4年生までの子ども約220人が、トーナメント方式で対戦。「お父さんと練習してきた」という関根貴春くん（小学1年生・山田）は、部門別で見事優勝。取り組み後はきちんと礼をして、互いの健闘をたたえます。大会後は春日野部屋力士と交流。体重190kgの力士に2～3人がかりで力いっぱい突進。何度も立ち向かう子どもたちに、会場から大きな声援が送られました。

伝承料理を引き継ごう

古くから伝わる地元の料理を引き継ごうと、6月22日に農業ふれあいセンターでふるさとの味伝承士による「冷や汁うどんの作り方講習会」が行われました。県内産の小麦粉を使い、粉からうどんを作っていきます。冷や汁には、農業ふれあいセンターで作った味噌と、市内で採れたゴマ・シソ・キュウリを使います。これぞまさしく地産地消。参加した松本幸樹さん（61歳・今成1丁目）は、「生地を伸ばしていくときの手の動きなど、やってみて初めて分かることが多いですね。家でも作ってみたいです」。

行って　会って　体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

ひとまち

地域のみんなが集う場所

貞観4年（863）に創建された古尾谷八幡神社（古谷本郷）。県指定有形文化財に指定されている現在の社殿は、享保7年（1722）に地域の皆さんの手で建てられました。その後何度か修理したものの、大正13年（1924）以後80年以上も大規模な修理は行われず、損傷が目立つように。そこで再び地域の皆さんの善意を集め、平成23年から同26年まで、3年以上にわたる大修理が始まりました。

「人が立ち寄れる環境を作り、維持していくのが氏子会の役目。その中で伝統を守り次代に受け継いでいきたい」と話すのは氏子会会長の伊藤勇夫さん（67歳）。神社を「みんなが集う場所」とするために、氏子会だけでなく、地域の女性ボランティアが境内の清掃などをしています。「裏にアジサイとユリを植えてくれました。散歩に来る人も多いですよ」と氏子会の内海馨さん（65歳）。子どものころから神社を遊び場としてきた人だけでなく、結婚してこの地域に来た人も、神社という場所を貴重なものと感じているようです。

6月16日に、市立博物館が主催する同神社の修理工事見学会が行われました。「約300年前の職人の技術を見る事ができてよかったです」と大木千鶴さん（32歳）。川越東高校2年の松田巽海さん・福田森さんは「学校の近くにこんな立派な神社があるとは知らなかった。過去の修理の跡を見ると、さまざまな人の意思が積み重なって今があるというのを実感できました」。修理を見学し、説明を聞くことで、神社を身近なものとして感じることができたそうです。

「地域の人をつなぐ場所としての神社を、ずっと大切にしていきたいですね」と伊藤さん。9月に同神社で、地域の子どもの成長を祝う「ほろかけ祭」が行われます。

上：川越東高校の生徒に説明する伊藤会長（写真右）
右：修理見学会の様子